『若きヴェルターの悩み』におけるオシアンの歌

林　　久　博

はじめに

ゲーテの『若きヴェルターの悩み』（以下『ヴェルター』と略記）の終盤，ヴェルターとロッテは高まる感情を抑えきれず口づけを交わす。その契機となるのは，彼が自分で翻訳し彼女に朗読して聞かせたオシアンの歌にある。オシアンの歌は最後に二人を結びつける決定的な役割を果たしている。しかしハンブルク版で 7 頁にもわたって挿入されているこの歌は，内容的にきわめて複雑である。そのため，なぜ二人がこの歌に感動したのか読者には理解しづらい。

『ヴェルター』はドイツ文学の代名詞とも言える作品である。にもかかわらず，例えば現在容易に入手できる二冊の翻訳[1]においても，オシアンの歌に関して十分な解説が加えられていない。オシアンの歌の複雑さを解きほぐし，その役割を明らかにする必要性があるのではないか，と筆者には感じられた。これが本論執筆の動機である。

以下に考察を進めていくが，まず「そもそもオシアンとは何か？」ということから本論を始めていきたい。

1．オシアンの歌について

オシアンとはスコットランド高地地方の伝説の詩人の名前である。彼は 3 世紀頃の人物と言われている。彼の父親はフィンガル王といい，自分の所領地を統治するばかりでなく，海外にも救援を請われて遠征したほどの勢力を保持していた。だがそれも長く続かず，一族の者たちも次々と戦場で倒れていった。最後に生き残った王子のオシアンは高齢となり失明した後，息子オスカルの許嫁で竪琴の名手であったマルヴィーナに一族の戦士たちの思い出を語り聞かせた。そのオシアンの歌をマルヴィーナが覚えていて，それを彼女が後世に残した，とされている[2]。

18 世紀半ば，ジェームズ・マクファーソン（1736－96）という一人の青年が現れる。ゲール語ができた彼は，古代ゲール語の古い資料の中からオシアンの歌を翻訳・編纂したと称し，『古

歌の断章』（1760 年），『フィンガル』（1762 年），『テモラ』（1763 年）の三冊を英語で出版した。1765 年には二巻本で全集[3]が，1773 年には改定版が出版された。

これらの書物の中で繰り広げられているのは，荒涼とした風土の中で活躍するフィンガル王一族の戦士たちの勇壮にして優しい人柄や，娘たちの悲しい運命である。マクファーソンが描いたオシアンの世界は，ヨーロッパ全土を巻き込むほどの反響を呼んだ。当時ヨーロッパではオシアン熱が広がって，子どもの名前に「オシアン」や「マルヴィーナ」と名付けることが流行した。1768 年にはドイツ語の翻訳が出版されている。若きゲーテも，オシアンの熱狂的支持者で後に「オシアン論」（1773 年）まで発表したヘルダーの影響で，一部分ではあるが翻訳もしている。Herbert Schöffler は，1770/80 年代のドイツ文学はヘルダーリンの『ヒュペーリオン』と同じくらいオシアンなしでは考えられないほどだった[4]，と述べている。それほどまでに影響力のある書物であったのである。

だがこのマクファーソンの本は後に偽作ないしは模作であることが判明した。事実，彼はそこに様々な要素を織り込んでいた。ハンブルク版で『ヴェルター』の解説をしている Erich Trunz は以下のように述べている。「(マクファーソンのオシアンには）古いアイルランドやスコットランドの伝説や民衆バラードからのモチーフもある。さらにホメロスのモチーフやイメージもあり，旧約聖書の中の詩篇や聖書の他の部分からの言い回しも認められる。ミルトンからも多く用いられ，トムソンからヤングまでの近代自然文学の要素もある。それ以外に，時代の一般的な感傷的・精神的な態度も認められる。そして，最終的にはマクファーソンの個人的な，少なくはない作家としての能力と独自性がある」[5]。しかし当時の人々は，マクファーソンという「翻訳者」によって，文字を使わない口伝えの文化（口承文化）が蘇ったと感じたのであった。過去の世界を追体験する感覚で，人々はこの作品を受け入れたのである。

オシアンに対する当時の若者の傾倒は小説内でも見て取ることができる。オシアンについては作品中 3 回しか言及されないが，そのうちの一つ，1770 年 7 月 10 日の手紙を見てみよう。

> 人が集まってロッテの話が出るとき，僕がどんなに馬鹿な振る舞いをしてしまうか，君にも見せたいよ。その上，彼女のことが気に入ったかと聞く人までいるんだ。── 気に入ったかだって！ 僕はこの言葉が死ぬほど嫌いだ。彼女をあらゆる感覚と感情で感じ尽くすことをしないで，気に入ったなんて言える人はどういう人間なのだろうか！ 気に入ったかとは！ そういえば最近，僕にこう聞いてきた人もいた。オシアンは気に入りましたかってね。(37)

「気に入ったか？」という質問の続きは，もちろん「気に入ったどころではない」だろう。ヴェルターはロッテの場合と同じように，この作品に対して「あらゆる感覚と感情」で感じ尽くさねばならないほどの愛を感じているのである。

さてここでヴェルターに質問した人は，なぜオシアンについて質問したのか考えてみよう。それは当時オシアンがドイツで大変な話題となっていたので，文学青年であるヴェルターに話題を振ってみた，ということだろう。さり気ない言葉であるが，ここに当時のオシアン人気を垣間見ることができる。

2．二つの歌

ヴェルターはロッテに二つのオシアンの歌を朗読した。『フィンガル』に収められた「セルマの歌（The Songs of Selma)」と「ベラソン（Berrathon)」である。彼は「セルマの歌」からはほぼ全文をロッテに朗読したのに対し，「ベラソン」は冒頭の一部を読み上げただけである。それぞれの歌の内容を以下に示しておきたい。

2－1.「セルマの歌」

「セルマの歌」はほぼ全文が朗読されていても「複雑な構造」であるため，「正確に理解していかなければ関連は不明確なまま」(6) である。よって本論では Erich Trunz の解説を手掛かりに「セルマの歌」の内容を述べていくことにしたい。

老齢の吟遊詩人であるオシアンは，亡き友人たちと彼の父フィンガルの居城セルマで集い合ったことを思い起こす。こうした集いでは必ず吟遊詩人たちが互いに歌を披露するのであるが，それは自分の歌とは限らなかった。彼らは他人の歌も記憶にとどめておいて，後日またそれを別の場所で繰り返すこともしばしばあった。まず，こうした吟遊詩人たちの行為を理解しておく必要がある。オシアンはかつてセルマの城で聞いた三つの歌を思い出し，歌い出す。

オシアンが歌う第一の歌は，昔セルマの城でミノナが歌った歌である。ただし，そのミノナの歌は，実はコルマの嘆きの歌である。オシアンはすでに亡くなったミノナの代わりに，かつてミノナが歌ったコルマの嘆きの歌を歌っていることになる。入れ子構造のため関連が分かりづらいが，そのような設定のもとで歌が進行していく。コルマにはザルガルという恋人がいるが，彼らの一族は長らく互いに敵視し合っている。そのためコルマの兄とザルガルが戦うことになり，相打ちで二人とも死んでしまう。恋人と兄という愛する二人の男性を同時に失ったコルマの悲しみと嘆きが，ここで歌われている。

第二の歌では，吟遊詩人ウリンが登場する。ウリンはかつて狩りの帰りに，リノとアルピンの交唱（Wechselgesang）を聞いたことがあった。それは（第一の歌で登場した）ミノナの兄モラルの死を嘆く歌である。その交唱を，昔セルマの城でオシアンはウリンと再現したことがあった。ウリンがアルピンのパートを，オシアンがリノのパートを互いに竪琴を奏でつつ歌った。しかしウリンが亡くなってしまった今，オシアンは一人で二つのパートを歌うのである。ここにも

複雑な入れ子構造があり，第一の歌と同様の分かりづらさがある。

さて，かつてオシアンがウリンと交唱したとき，その場にいたアルミンが自分の死んだ息子アリンダルと娘ダウラを思い出し，その悲しみを歌ったことがあった。そのアルミンの歌が，オシアンが歌う第三の歌である。アルミンの歌の内容をまとめておこう。

アルミンの娘ダウラにはアルマルという婚約者がいる。このアルマルがエラトの兄を殺してしまったことからすべての悲劇が始まる。兄を殺され激怒したエラトはアルマルに復讐するため，彼の婚約者ダウラを言葉巧みに連れ出す。エラトの策略に気付いた彼女は救いを求める叫び声をあげる。その声を聞いた彼女の兄アリンダルによって，エラトは捕えられる。遅れてアルマルも駆けつける。アルマルはエラトを殺すつもりで矢を放つが，なんとその矢がアリンダルに命中してしまう。さらにアルマルは海の岩場に置き去りにされたダウラを助けようとするが，波に飲み込まれて死んでしまう。大切な二人の男性を突如として失ってしまったダウラもまた，その場で亡くなってしまう。息子と娘，そして娘の婚約者を失ったアルミンは途方に暮れている。

以上，ヴェルターが朗読した「セルマの歌」の内容を述べた。入れ子構造もあり，人名も数多く挙げられる[7]ので，関連を確かめつつ読んでいかないと理解は困難であろう。

2－2.「ベラソン」

「セルマの歌」のあと，ヴェルターは「ベラソン」の冒頭の一部を読み上げた。短いので全部引用しておく。

> なぜお前は私を目覚めさせるのか，春風よ。お前は媚びて語りかけてくる，私は天の雫を持って参りました，と。しかし私の枯れるときは近づいている，私の葉を散らす嵐は近づいている！ 明日，旅人がやって来るだろう。私が美しかったとき，私を見たことがある旅人がやって来るだろう。くまなく彼の眼差しは野の中に私を探し求めるだろう，しかし私を見つけることはないだろう。(114)

ここでの「私」とは植物のアザミを指している。アザミは自分が枯れてしまう（つまり死が近いこと）をここで歌い，その死の予感がオシアンへと引き継がれる。老齢で盲目のオシアンの周りでは，身近な人たちが次々と亡くなっていく。息子オスカルの許嫁で，オシアンに忠実であったマルヴィーナも死んでしまう。オシアンは彼女の死の知らせをアルピンの息子から受ける。オシアンは，自分とトスカル（マルヴィーナの父）が赴いた戦いのことを，アルピンの息子に語って聞かせる。

その内容はこうである。ベラソンと呼ばれるスカンジナビアの島にラースモアという老王がいた。この老王は，自分の息子ウタールによって洞窟に幽閉される。フィンガルはかつてこの王に

親切にもてなされたことがあり，それ以来親しい間柄であった。フィンガルは老王を救済しウタールを処罰するために，息子のオシアンとその友人トスカルを派遣する。ところでこのウタールは非常に逞しいだけでなく，女性たちの目を引くほどの美貌の持ち主でもあった。彼はニナソマという女性に愛され，彼女と行動を共にしていた。しかし彼は別の女性が好きになり，ニナソマをある洞窟に置き去りにする。オシアンは彼女を見つけ，ベラソンへ連れていく。オシアンはウタールを倒す。ニナソマは捨てられた身であるにもかかわらずウタールの死を嘆き悲しみ，絶命してしまう。オシアンはこの不幸な二人のことを歌う。歌の最後は，オシアン自身の死が近いため，自分の名声が後世に残ることを願って閉じられる。

3．歌の内容分析

本章では『ヴェルター』において，これらの二つの歌がどのような意味合いを持っていたかを考察していく。

ヴェルターによって「セルマの歌」が朗読されたとき，彼とロッテは激しく心を揺さぶられる。編者によってこの時の状況は次のように説明されている。

> 二人の感動は凄まじかった。二人は自分たちの不幸をこの高貴な人々の運命の中に感じ取った。二人は一緒に感じたのであった。二人の涙は溶けあった。(114)

翻訳したヴェルターは，もちろん歌の内容を理解している。しかし初めて歌を聞いたロッテには，その詳細を把握することは困難であっただろう。ただし彼女はこの歌の中から，ひとつの悲劇的なモチーフを見出すことができた。「セルマの歌」の第一の歌では，その恋人と兄が不運な定めによって殺し合うことになる女性の悲劇が歌われた。(第二の歌は次の第三の歌へと繋げる接着剤のような役割である。これについては，ロッテには理解できなかったかもしれない)。第三の歌は，兄が誤って婚約者に殺され，婚約者も波に飲み込まれ死んでしまう女性の話である。第一と第三の歌ではともに，身近な二人の男性（兄と恋人）が災いに満ちた運命によって死んでしまう女性の嘆きが歌われている。アルベルトとヴェルターという二人の男性の間に立たされているロッテは，これらの歌の女性たち（コルマとダウラ）に自己を見出し，激しく心を揺り動かされるのである。

一方のヴェルターにしても，この歌の男たちは自分の置かれた状況を指し示していた。ここで描かれているのは，運命によって罪もないのに悲劇的な状況に置かれて死んでいく男たちである。ヴェルターはこの時点ですでに遺書を認めており，自殺を覚悟している。しかしその自殺は，自分を責め抜いた上での悲観的な意味合いはない。そこには愛するロッテの幸せために自分が犠牲

となる，という甘いヒロイズムがある。ロッテに宛てた遺書としての最後の手紙には以下のような記述がある。

> 何千もの計画や希望が僕の心の中を荒れ狂いました。そして，ついに，しっかりとゆるぎなく，最後のただ一つの考えが決まったのです。僕は死にます！［…］それは絶望ではありません，がんばり通したぞという確信です。あなたのために自分を犠牲にするのだという確信です。［…］僕ら三人のうち誰か一人が去らねばならない。僕がその一人になろうと思います！（104）

自分に罪はないが，自分がいなくなればそれですべて丸く収まる，だから死ぬのであり，それが運命なのだ，と彼は遺書の中で述べている。それ故彼は，罪がないのに死んでいく男たちに感情移入できるのである。

ヴェルターは「二・三のオシアンの歌（einige Gesänge Ossians）」（107）を翻訳した。彼が翻訳したのは「セルマの歌」と「ベラソン」だけかもしれないし，またはもう一つ訳していたのかもしれない。それは定かではないが，いずれにしろ複数ある歌の中で彼が最初に「セルマの歌」を選び出したことに，彼のしたたかな戦略性を見て取ることができる。「ベラソン」と比べてこの「セルマの歌」の中には，ヴェルターとロッテの置かれた立場や感情が的確に表現されている。それを翻訳者たるヴェルターは熟知している。彼が何も考えていなければ「ベラソン」を先に朗読してもよかったはずである。狡猾にも彼はそうしなかった。この歌を読む前から，朗読後の二人の心の高揚を彼はすでに予期していた。だからこそ彼は意味ありげに「微笑して（lächeln）」（108）から，朗読を始めるのである。

「セルマの歌」が中断され，二人は感極まって唇を重ねる。このあとヴェルターは続きを読もうとしない。それはなぜかと言えば，歌の続きには「オシアン自身の老い」が述べられている[(8)]からであり，若くして自殺しようとしているヴェルターには全く相応しくないからである。この点からも彼は戦略家であると言える[(9)]。彼は読むのをやめ，別の歌に切り替える。

ヴェルターが次に選んだのは「ベラソン」であり，すでに朗読部分を挙げておいた。この歌のテーマは「セルマの歌」と少し異なっている。そこには愛する二人の男を失った女性の悲しみは歌われていない。愛する一人の男を失った女の悲しみがあるだけである。この歌はロッテを感動させるためのものではないし，ロッテ自身は口づけの後，冷静さを取り戻そうとしている。「ロッテは気を取り直そうとして深く息をすると，すすり泣きながら続きを読んでくれるよう彼に頼んだ」（114）。ヴェルターが「ベラソン」の当該個所を朗読したのはもちろん，すでに遺書を認めている自分自身の死を，枯れていくアザミで表現したかったからに他ならない。つまり自分自身のために朗読するのである。

この「ベラソン」からの引用を彼は気に入っていたようである。彼はすでに朗読（12 月 21 日）の二ヶ月以上前（10 月 12 日）に，この個所を引用している。

> 美しかったときの私を知っている旅人が来るだろう。来て問うだろう。かの歌人，フィンガルの優れた息子はどこにいるのか，と。旅人の足は私の墓の上を越えて行き，空しく彼はこの地上に私を探し求める。(82)

このときヴェルターは原稿を見ていたわけではないので，思い違いのところも多い。ここでの「私」とはオシアンを指しているが，アザミが正しい。しかし，自らの死をテーマとしている点では同じである。

以上見てきたように，これらの歌にはヴェルターとロッテの両者を感情移入させる要素が盛り込まれており，彼らを理性の崩壊へと導いていく。ただ，理性の崩壊へと導くのは，その歌の内容だけではない。オシアンの歌の中の「風景」も一つの要因となっている。

歌の風景において特徴的なのは嵐（Sturm）であり，Sturm やその関連語（stürmend, stürmisch, stürmen）が何度も言及されている。嵐は世界を掻き乱し，秩序を崩壊させていく。掻き乱され無秩序な世界だからこそ，許されざる二人の愛が一瞬だけ可能となるのである[10]。さらにもうひとつ，オシアンの歌を「朗読したこと」が二人の結びつきを可能にした，と筆者は考える。これについては次章で説明したい。

4．朗読すること

本章では，二人の身体的結びつきをオシアンの歌そのものではなく，それを「朗読したこと」にも求めてみたい。

さてあらためて，なぜヴェルターがこの歌を朗読したのか問うてみたい。それはロッテに頼まれたからである。ロッテは彼から渡されていたオシアンの訳を「まだ読んでいなかった」(107)。それは，彼に「聞かせてもらおうと思っていた」(107f.) からである。美留町義雄氏によると『ヴェルター』は「口承と書承という伝達様式の過渡期」[11] に書かれた小説であり，この時代には「口承」という音読による作品内容の伝達（朗読）と，「書承」という文字情報による声に出さない伝達（つまり黙読）が併存していた。朗読でも黙読でも不自然ではなかったこの時代に，あえてロッテはオシアンの歌が朗読されるべきだと思ったわけである。それには二つの理由があったと考えられる。

オシアンの歌はそもそも 3 世紀頃の無文字時代の歌である。無文字世界では未来への伝達手段を持ちがたい。そのため英雄たちは自らの名声の行く末を案じ，吟遊詩人を抱える。彼らに自分

たちの名声を暗誦させ，後世に語り継いでもらうためである。オシアンはこうした口承文化そのものである。ヴェルターと対等に文学談義のできるロッテが，オシアンの文学的背景を知らないはずはない。よって，オシアンの歌に対しては黙読ではなく朗読が選択された。これが第一の理由である。

第二の理由は，朗読という行為の特殊性にある。黙読が精神的行為であるのに対して，朗読は精神的かつ身体的行為である。朗読者は唇を動かして声を発しなければならない。朗読される者は，その声を耳で聞かなければならない。両者はともに身体という媒介を必要とする。身体性を求める意識が，愛情を抑えきれないでいるロッテに歌の朗読を選択させた，と見なすことができるであろう。

ロッテとヴェルターはお互いの身体を求め合っている。その様子をロッテから見てみよう。ヴェルターに対するロッテの身体的欲望は，例えばカナリアの場面（Vgl. 79f.）に明らかである。彼女は自分と口づけさせたカナリアを，ヴェルターにも口づけさせる。間接キスの形だが，これは彼からの口づけを煽っているようなものである。また彼女は何度となく彼と二人だけで一つの部屋にいることがあったが，これは極めて大胆な行為である。トーマス・マンはロッテを称して「純潔に包まれた媚態」[12] と呼んだ。まさにその通り，彼女はアムビヴァレントな存在で，夫のアルベルトに誠実でありつつも，同時にヴェルターに愛情を抱いている。「旅行でもして他の女性を見つけたら」という提案をした後になって，ようやく彼女は「彼を自分のためにとっておきたい」(107) という自分自身の強い欲望に気付くことになる。

一方のヴェルターには，ロッテの身体を求める様子がはっきりと見て取ることができる。まず彼は，彼女との間接的な接触を試みる。つまり彼はロッテのシルエットを作ったり，彼女からの手紙に口づけする（Vgl. 41）のである。その後彼は，彼女を求める気持ちを抑えきれなくなり，直接的な接触を欲望するようになる。「たった一回でも彼女をこの胸に抱きしめることができたら」(83) とか，「僕はもう何百回と彼女を抱きしめようとした」(84) と彼は述べている。また夢の中で彼は「ロッテを抱きしめ，かたく胸に押し付け，愛の言葉をささやくその口を，限りない口づけで覆っていた」(100)。欲望が具体化（肉体化）されることを彼は密かに望んでいるのだ。

次第にお互いの身体を求めていくその心の変化を，二人の読書形態の変化に見て取ることができる。二人の読書は当初，黙読であった。彼らは孤独な黙読によって読書し，同じ文学作品に没頭したという共同意識によって，お互いへの愛をはぐくんできた。それは最初の文学談義や，クロップシュトックの『春の祝祭』を互いに思い出した雷の場面に見て取ることができる。ヴェルターはこうした読書によって「僕とロッテが一体になれる」(75) と感じている。それは彼女の夫アルベルトには不可能である。読書においてアルベルトとロッテの心は「共感して鼓動することはない」(75) からである。ロッテも共通の読書体験が自分とヴェルターを結びつけているこ

とを意識しており，またそれが彼女には大きな喜びとなっている。そういった彼女の気持ちは，以下の引用に表れている。

> 従妹が，先日お届けした本はお読みになりましたか，と尋ねた。──「いいえ」とロッテが言った。「あの本は好きにはなれませんでした。お返しするわ。その前のもあまりよくありませんでした」。── それはどういう本なのか僕は尋ねてみたが，彼女の返事を聞いてびっくりしてしまった。── 彼女の言ったすべてのことには豊かな個性が感じられた。一言口にするたびに，新しい魅力，新しい精神の輝きが，彼女の表情から現れてくるのを僕は見た。彼女の表情は，僕に理解されていることを僕の様子から感じ取って，次第に楽しげにほどけていくように思われた。(22f.)

だが身体を求め合う二人は，最後の最後で黙読ではなく朗読を始める。黙読による読書では限界があり，間接的な気持ちの確認で終わってしまう。しかし朗読は互いに面と向き合うため，直接的・身体的に振る舞うことができる。それ故にこの場面で朗読が選ばれ，二人は伝統的な愛の証である口づけを交わすのである。

一冊の書物を二人で朗読することによって，その二人がお互いへの愛を確認し合い，やがてその精神的結びつきが二人の口づけへと移行するというモチーフは『ヴェルター』にだけ見られることではない。Friedrich A. Kittler が指摘している[13]ように，これはヨーロッパ文学における伝統のひとつである。Kittler はダンテの『神曲』の中のパオロとフランチェスカの例を取り上げる。この二人はある物語の一節を朗読した。それは，円卓の騎士ランスロットと彼が仕える王の妃ギネヴィアが互いに恋心を抱き，口づけを交わすという禁断の愛の場面であった。フランチェスカの言葉を引用しておこう。

> ある日私どもはつれづれに，ランスロットがどうして
> 　愛にほだされたか，その物語を読んでおりました，
> 　二人きりで別にやましい気持ちはございませんでした。
> その読書の途中，何度か私どもの視線がかちあい，
> 　そのたびに顔色が変わりましたが，
> 　次の一節で私どもは負けたのでございます。
> あの憧れの微笑みにあのすばらしい恋人が接吻(くちづけ)る
> 　あの条(くだり)を読みました時に，この人は，
> 　私から永久に離れることのないこの人は，
> うちふるえつつ私の口に接吻(くちづけ)いたしました。[14]

こうした禁断の愛は，朗読しているパオロとフランチェスカにも当てはまる。この二人も不倫関係にあるからである。この物語の中に自分たちの姿が映し出されているために，二人は感動し口づけを交わすのである。ゲーテはこうしたヨーロッパ文学の伝統を，ヴェルターとロッテにおいて実に巧みに利用しているのである。

5．まとめ

本論の文献調査に当たって気付いたことがあった。それは，『ヴェルター』におけるオシアンの歌は論じられることが極めて少ない，ということである。日本語論文に限って言えば，これを正面から扱った論文は長谷川弘子氏の論文[15]たったひとつしかなかった。オシアンの歌について論じることは忘れ去られたことのように思える。しかし，この歌は『ヴェルター』のクライマックスに，しかも 7 頁という長さにわたって挿入されている。この歌を無視，または軽視すべきではないだろう。

上で挙げた長谷川氏によれば，1770 年代の感傷主義サークルで「憂鬱な英文学」が好んで読まれた。そこには「過ぎ去って戻ってこないものに対する哀惜の気持ち」が描かれていた。それがオシアンの歌にあるため，当時の感傷主義的読者にも十分この歌は理解可能であり感動を誘った，と氏は述べている。当時の一部の読者にはこの歌は理解できたであろう。しかし，現代の読者にとって，オシアンの歌は『ヴェルター』通読を妨げる要因となっている。本論での試みは，現在の読者のために，「読みにくさ」を少しでも解消することであった。それと同時に本論では，たった四週間で書き上げた[16]とは思えないほど実に巧みに，多くの意味がオシアン朗読に込められていることを指摘したつもりである。歌の内容がロッテとヴェルターの現状を表していたり，歌の選択に際してヴェルターの戦略性や狡猾さを垣間見ることができ，さらには朗読の効用とその伝統も見て取ることができた。そういった奥深さを『ヴェルター』におけるオシアンの歌は秘めているのである。

テクスト：
Goethe: Die Leiden des jungen Werther. In: Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Bd. 6. Hrsg. von Erich Trunz. 14. Aufl. München (C. H. Beck) 1996. を使用した。テクストからの引用は本文中（　）内にページ数を記した。

【注】

⑴　高橋義孝訳（新潮文庫）と竹山道雄訳（岩波文庫）の『若きウェルテルの悩み』を参照のこと。

⑵　オシアンについては以下の文献に詳しい。
中村徳三郎訳：『オシァン　ケルト民族の古歌』（岩波文庫，2010 年）443-473 頁。（あとがき）
高橋哲雄：『スコットランド　歴史を歩く』（岩波新書，2004 年）91-126 頁。（第 4 章　オシアン事件）

⑶ 『ヴェルター』で使用されているのはこの二巻本のオシアンである。Vgl. Gaskill, Howard: "Ossian hat in meinem Herzen den Humor verdrängt": Goethe and Ossian Reconsidered. In: Goethe and the English-Speaking World. Essays from the Cambridge Symposium for His 250th Anniversary. Hrsg. von Nicholas Boyle und John Guthrie. New York (Camden House) 2002, S. 49.

⑷ Schöffler, Herbert: Ossian. Hergang und Sinn eines großen Betruges. In: Deutscher Geist im 18. Jahrhundert. Essays zur Geistes- und Religionsgeschichte. Hrsg. von Götz von Selle. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1956, S. 149f.

⑸ Goethe, a.a.O., S. 589. (Anmerkungen von Erich Trunz) また Schöffler も同じ点を指摘している。Schöffler, a.a.O., S. 149.

⑹ Ebd., S. 595.

⑺ ヴェルターが朗読する「セルマの歌」には 23 人もの人名が挙げられる。順番に，オシアン，フィンガル，ウリン，リノ，アルピン，ミノナ，ザルガル，コルマ，トルマン，モラル，オスカル，モルグラン，アルミン，カルモル，ガルマル侯，コルガル，アンニラ，ダウラ，アリンダル，アルマル，オドガル，エラト，アルナト。

⑻ 省略された「セルマの歌」の最終部は Trunz の解説にも記されているので，ここに訳出しておく。「お前たちの誰も同情して語ろうとしないのだろうか。彼らは彼らの父を見ることはないのだ。私は気分が沈んでいる，カルモルよ，私の悲痛の原因は小さくはないのだ！ ── 歌を歌って日々を過ごした吟遊詩人たちの言葉はこういったものであった。王は竪琴の響きと過ぎ去った時代の物語に耳を傾けた。領主たちは彼らの丘陵から現れて，その愛らしい音に耳を傾けた。彼らは何千という吟遊詩人の中でも第一の吟遊詩人であるコナ（オシアン）の声を称賛した。しかし今や年齢のことが私の喉まで出かかっている。私の活力は消え去っている。私はときどき吟遊詩人たちの亡霊の声を聞き，彼らの愛らしい歌を学ぶ。しかしその記憶は私の心の中で消えてしまう。私にはこれまでの年月の呼び声が聞こえる。年月は過ぎ去りながら語りかけてくる，オシアンはどうして歌うのか，まもなく彼は狭い家の中で横になるだろう，そして彼の名声を高める吟遊詩人もいなくなるであろう，と。回れ，暗き年月よ，お前たちはその行く先で私に喜びをもたらすことはないのだ。オシアンのために墓穴を開けてやれ，彼の強さはとうに失われているのだ。歌の息子たちが眠りについてしまった。嵐が静まったあと，遠く海を取り囲む岩壁の上でざわめく息のように，私の声は残っている。暗い沼地が音をたて，遠くから船乗りが揺れ動く木々を眺めている。」(Vgl. Goethe, a.a.O., S. 597.)

⑼ ヴェルターの戦略性はそのピストル自殺において際立っている。彼はオシアン朗読後，アルベルトから借りたピストルで自殺する。それは夫のピストルで命を絶つことにより，ロッテがヴェルターの自殺の共犯者であることを彼女に示したかったからに他ならない。ここにはロッテへの配慮などない。死後においてもロッテの心を掻き乱したいという戦略がここにはある。事実，彼の自殺によってロッテは「命が気づかわれる」(124)状態となる。

⑽ オシアンの世界の無秩序性は，その世界を表現する際の副詞にも表れている。Eberhard Mannack によれば，オシアンの世界では hier, da という副詞が特徴的であり，それが小説前半で多用された rings, ringsum, umher といった副詞を追いやっている。rings, ringsum, umher は周囲との関係性を強調する副詞である。そこには全体を意識する眼差しがある。それに対して hier, da は他との関係性に乏しく，自己完結的である。「そこに岩と木があり，ここにはざわめく流れがあります（Da ist der Fels und der Baum und hier der rauschende Strom)」。「ここには木と岩があります！ ザルガルよ！ 愛しい人よ！ 私はここにいます（Hier ist der Baum und der Fels! Salgar! mein Lieber! hier bin ich)」(109)。これでは風景が細切れにされたかのようで，秩序が欠如していると言わざるをえない。ちなみに，それぞれの副詞の登場回数を数えてみると，以下のような結果になった。rings, ringsum, umher は小説第一部で計 25 回，第二部で計 7 回。hier は第一部で 22 回，第二部では 47 回使用されている。(ちなみに hier はオシアン内で 8 回使用されている)。それぞれにおいて，第一部と第二部での劇的な逆転現象を認めることができる。Mannack, Eberhard: Raumdarstellung und Realitätsbezug in Goethes epischer

Dichtung. Frankfurt a.M. (Athenäum) 1972, S. 44.

⑾　美留町義雄：「ゲーテ時代における口承と書承の相克―『若きウェルテルの悩み』をめぐって―」(大東文化大学紀要，第 38 号［人文科学］，2000 年）98 頁。

⑿　Mann, Thomas: Goethe's >Werther<. In: Gesammelte Werke in 13 Bänden. Bd. 9. Frankfurt a.M. (Fischer) 1990, S. 652.

⒀　Kittler, Friedrich A.: Autorschaft und Liebe(1980). In: Hans Peter Hermann. (Hrsg.): Goethes >Werther<. Kritik und Forschung. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1994, S. 295-316.

⒁　ダンテ（平川祐弘訳)：『神曲』(河出書房新社，1989 年）22 頁。(河出世界文学全集第 1 巻)

⒂　長谷川弘子：「『若きヴェルターの悩み』における感傷主義的合言葉としてのオシアン」(杏林大学外国語学部紀要，第 21 号，2009 年）137-151 頁。

　また神尾達之氏もページ数を割いてオシアンの風景について解説している。神尾達之：「鏡の前から飛ぶカナリア（承前）―『若きヴェルテルの悩み』に於る自然性の問題―」(茨城大学人文学部紀要・人文学科論集，第 27 号，1994 年）61-88 頁。本論執筆に際し，両論文は非常に参考になった。

⒃　Goethe: Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit. In: Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Bd. 9. Hrsg. von Erich Trunz. 14. Aufl. München (C. H. Beck) 1996, S. 587.